

---

# 我らは卓球部っ！！

ネッシー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

我らは卓球部っ！！

### 【Nコード】

N8889E

### 【作者名】

ネッシー

### 【あらすじ】

部活紹介の時に現れたとんでもない奴は、卓球部の部長だった。成り行きで入った卓球部での色んな出来事です。

## 第1話：部活紹介

俺は今年から高校生になる…。

今は高校の入学式で、温暖化のせいか、もう緑になってしまった桜を窓から見ながら、お決まりの事しか言わない、長つたらしい校長先生の話を聞いている。

いや、左から右に聞き流してると言った方が正確か…。

ぼんやりしていると、どうやら入学式が終わつたらしい。

前にいる俺の担任になつたっぽい人が、なんか指示をだしている。

あいうえお順で並んでいるので、山本昭人<sup>やまもとあきひと</sup>である俺は後ろの方にいて全く聞こえない

俺のクラスが動き出したので、みんなに便乗し立ち上がる。  
そして俺のクラスである一年一組についた。

その後、先生が諸注意などを色々話してから、

「このあと部活紹介があるから見ていくと良い」と言いクラスを出ていった。

俺は帰ろうかな、とも思ったが周りが誰も動かないので、まあ良いか、と思って見ていくことにした。

「野球部です！」とか言って素振りを始めたり。

「合唱部です！」とか言って歌い出したり。

他のところも印象の濃いものはあまり無かった、まあ合唱部は結構上手くて感動したが、あのアカペラってヤツ？でも、まあその程度だ。

最後の方になってきてみんな飽きてきたころ、そいつらはやって来た…。

一応クラスのドアを空けて

「おい、お前行けよ」

「やだよ、お前が行け」

とか言っって譲り合っている。

ハッキリ言って

「何こいつらキモッ!!」と本気で思った。

結局二人で入って来て、真ん中まで来ずに、はじっこの方で「卓球部です…。」とか、言っている。

さすが、卓球部だなとか思っていると、タタタ…、とでっかい旗を持って廊下を走っている人影が見えた。

そして一年一組の開いているドアから、思いつきり「とうあっ!!」とか言って、ジャンプして先に居た二人の前に降り立った。旗にはでっかく『来たれっ!卓球部っ!』の文字が、

「こんっにちわーっ!! 卓球部部長のサクちゃんですっ!」

…みんな唾然としている。もちろん俺もである。

さっきから居た連中と、

「お前の担当はここじゃねえだろ?」

「良いじゃん×2、お手伝いだよ、お・て・っ・だ・い」

なんて話してる…。最初に居た連中は頭を抱えている。

サクちゃんがこちらを向いた

「では×2、皆さんに質問があります！この中で、俺私、中学の頃卓球やってましたよ」とか言う人」

「ハイッ！」とかいってサクちゃんは右手を高く上げている。

…

…俺のクラスは誰も手を挙げない。

これは予想通りだったのかサクちゃんは続けた。

「では×2この中で卓球に遊びでも良いから触れたことがある人」

また「ハイッ！」とかいって手を上げている。

…

…また誰も手を挙げない

ちよっと焦った感じになってサクちゃんは続けた。

「じゃ、じゃあ、卓球を知っている人」

「ハイッ！」

：

誰も手を挙げなかった。

サクちゃんはちょっと涙目になって言った

「うそ×2有り得ないって卓球って日本人の99.999%は知ってるよ！ 手上げてよ！俺、無視されてるみたいじゃん悲しい！悲しすぎる！」

みたいじゃなくてされてんだよ、って思ったけど言う訳がない

周りを見てみると、2、3人の親切な子が遠慮がちに手を挙げていた。

サクちゃんはパーっと向日葵みたいな明るい笑顔になって

「その今上げてる子！ 最高っ！愛してるっ！」

「では×2、今上げた子も上げて無い子も卓球部は大歓迎ですっ！  
！ 女の子でも初心者でも大歓迎！特に女の子っ！ 入ってっ！  
我が部活に花が欲しいんだっ！」

男しか居ないのか…。

「我ら卓球部は、永遠に不滅だーっ！」

とか、訳の分からん事を言っつて、サクちゃんは走って教室を出よう  
としたが、何も無いところで「へぶっ！」とか言っつて豪快に転んで  
いた。

…

直感的にこの部活には誰も入らないだろうなと思った…。

…つづく



## 第2話：入っちゃいました

俺が卓球部に入ったのは成り行きだ。

ただ、絶対に部活には入らなくてはならなくて、それに俺は人と話すのが苦手だから、卓球部なら大丈夫かなと思っただけだ。

仮入部に行った時に喜ばれたから、というわけでは無い

あの向日葵のような笑顔で、本当に嬉しそうな顔で

「ありがとう」

って言われたからでは断じて無い…！

…たぶん。

ちよつとだけ、俺がここに居たら喜んで貰えるのかな？とか、俺が必要とされているのかな？とかとも思っちゃったから、

…もしかしたら、少しだけ、あの笑顔にほだされたということもあるかもしれない。

別に俺だけが特別では無い、来た人全員にあの笑顔を向ける。

でも、俺が来たことでそんなに歓迎された事が無かったから…、やっぱり嬉しかったんだと思う。

その卓球部はスゴかった。何がスゴいかって、仲間外れが居ないのだ。

どこの部活だって、上手い人と下手な人で派閥が分かれたり、気持ち悪い奴がいたら仲間ハズレにしたりすると思う。

みんなで練習を始めて、1人位あぶれていたりすると、サクちゃん改め、作山先輩が絶対に気づいて、その人の所へ向かい  
「俺と一緒に打ってくれない？」と言う

メガネ掛けていてクラスで気持ち悪いとか言われてそんな奴でも、絶対に手を差し伸べる…。

俺みたいないつも「1人で良い」とか言っている奴が、それを言われる訳なんだけど、それが強がりだったんだと思い知らされる。

なんて嬉しいんだろう…。

作山先輩は背が高く、顔が小さくて、ちょっとだけカッコいい。なんかバスケットをしてると言った方が絶対に納得できる。

前に身長を聞いたところ185cmと言った。

俺が誰も入らないと思った卓球部は新人部員が5人も入った。

男三人、女二人だ、なんと女の子が入っている。1人は中学でもやっ  
つていてもう1人は初心者らしい

作山先輩は部長だけど二年生だ、ここは進学校で三年生になったら  
もう世代交代みたいだ。

部活の最初は初心者組と経験者組で分かれて練習している、と言っ  
ても初心者は俺と女の子の二人しか居ないんだけど…。

その時に色んな人が教えくれるんだけど、ちょっと紹介しようと思  
う。

まずは作山先輩の場合…

ぼーん ぼーん

「ヤベ×2めちやくちや才能あんじゃん、すげえうめえ！ 俺の最初の時の十倍うめえ！」

「ほんとですか？」

「おう、俺が小三の時より100倍うめえ！」

「…」

「でもな、ちょっと肘下げて、もうちょっと前で打つと良くなるべ？ そう、まるで俺のようにな！」

「…」

…

次は副部長である、河内先輩の場合。

「違っっ！手の位置はここっ！」

「えっ、ここですか？」

「違っっって言うてんだろっ！ここだ、ここ！」

「えっここっ？」

「そう！そこだ！ じゃあそのまま素振り100回！」

…

普通の二年の平部員の坂籾先輩の場合。

「いやあそれじゃダメだろ？」

「えっどこですか？」

「どっがって、玉が相手の所に入って無いじゃん」

「…」

「だって相手の所に入れなきゃダメだろ？ ほら、こんな感じで入るから」

…

…と、まあ印象が大きいのはこんな感じだ。

部内ではこの三人がずば抜けて上手いが、一番教えるのが上手いと思うのが作山先輩だと思う。

作山先輩は絶対に強制しない。それどころか

「教えんの上手く無い人も居るだろ？ 自分が違うと思ったら言うことなんか聞く振りして聞かんで良いから。良いとこだけ貰っとな！ もちろん俺もな」

なんて言ってる。

最初の作山先輩の印象はかなり変な人

今の作山先輩の印象は、『世界一明るくて、世界一優しい人』

…じじく

### 第3話：優しさの塊

作山先輩は優しい…。  
って言うか自分ではそう見せてないつもりかもしれないけど、優しさが滲み出ている。

帰りの電車で4人位で座って談笑していた時なんかは、

「あはは、あー面白れえ…。

やべえ、ちよつと今立ってみたい気分だわ」

とか言って立ち上がり

みんなで「なんだよそれー！」とか言って笑っている

ふと、周りを見てみると赤ちゃんを抱えたお母さんがドアから入って来たところで、

座席は埋まって居たけど、タイミング良く立ち上がったおかげで作山先輩の居たところに難なく座れている。

そして当の立った本人は、

「ははは、マジかよー！」

とか言って談笑していた。

まあその時は、たまたまだろうなとか思っていた、

そして、ある程度経った頃

「ちよつと広樹立て！」

といきなり坂籐先輩に声をかけた

「なんだよそれ？」

「今から女の子口説くのに前がそこに居ると邪魔で口説けないんだよ！」

少し考えた後、坂籐先輩は納得した顔になり笑って「ああ」とか言っ  
て立ち上がったけど、俺には何の事だか全くわからない。

そして作山先輩を観察していると、

「お嬢さん、お荷物をお持ちでしょうか？」

と、もう還暦は越えているだろう腰の曲がったお婆さんに声をかけていた。

「ふふ、大丈夫ですよ。」

「ああ、こんな素敵な女性の荷物が持てないなんて！せめてお座りになった姿を見せて下さい！」

「じゃあお言葉に甘えさせて頂きますね。ありがとうございます」

その後も「どこで降りるんですか？」とか言って、俺が自分の駅に



降りる時までは話し続けていた。  
二人とも終始笑顔だったのが印象に残っている。

そういえば、こんな事もあった。

俺が傘を忘れて困っていた時、

「山本、お前傘忘れたのか？」

「あ、はい……」

「そっかあ！ちょうど良かった！この傘余ってたんだよ、誰にも使われなくて可哀想とか思ってた、これでこの傘もちゃんと役目果たせるな！」

と、笑顔で渡される。

「ありがとうございます！」

その時は良く考えないで受け取っちゃったんだけど、それが間違っていた。

…次の日

授業が終わり貸して貰った傘を持ち卓球部の部室まで行くと、マンガを読んでいる坂籐先輩がいた。

「おう！」

「こんにちは！あ、今日作山先輩来ますか？」

「来るんじゃない？どうして？」

「いやあ、昨日借りた傘を返そうかと思って…」

ばっ、と驚いた顔をしてこっちを向き、傘を見て、そしてまたマンガに視線を戻すと、笑いながら、

「あいつバカだな」

と言った。

どうしてか分からなくて意味を聞くと

「サクに言わないなら教えてやる」

と言われ何度も頷いた。

「あいつさ昨日俺が『傘は？』って聞いたたら『今日は濡れて帰る日！』とか笑って言うんだぜ！普通に忘れたのかと思ってたわ。」

全然分からなかった。

今すぐ会いに行つて、すごく謝りたいけど坂籐先輩に念を刺されてしまった

「サクに言うなっていう約束守れよ、ありがとつって言うときゃアイツが一番喜ぶんだ。」

作山先輩が来たときは、精いっぱい気持ちを込めて「ありがとう」  
「ございました！」と言おうと決めた。

「サクってさ優しいだろ？」

いきなり坂籐先輩に声をかけられた。

「はい！」

俺は正直に答える

「サクの優しさってな、自分を大切にしない優しさなんだよ。」

何となく分かる気がする。

「でな、自分一人で頑張って、人の優しさを受け入れないんだ。  
人に頼った所なんて見たことが無い」

そう言われてみれば、そうかもしれない。

「だからな、時々で良いから助けてあげてやって」

俺は、首を縦に振った。

「ありがとう」

その言葉が、本当に作山先輩の事を思っている事が分かって、坂籐先輩も優しい人なんだなと肌で感じた。

その後は部員がぞろぞろやって来て、俺と坂籐先輩の話も終わり、傘を返して、その日は可もなく不可もなく終わったが、少し作山先輩の事が分かったような気がした1日だった。

…つづく

### 第3・5話・優しさの理由（サク独白）

俺には中学校時代の友達が居ない、この高校にはその事実を知っている人はほとんど居ないだろう。

この友達が居ない訳の一つにイジメられていたというのがあったと思う。

別に、被害はあまり無かった

ただ少しだけ無視されて、少しだけ机を遠ざけられただけだ。

みんなにとって俺は少し気持ち悪かったらしい。

俺はちよつと汚かったから

もちろん話し掛けてくれる人も居た、

…けれど、俺から離れた。

だって俺と話しているせいでその優しい人まで気持ち悪がられたら、耐えられないだろ？

離れるなんて簡単だ、その人を無視してやれば良い、

そうすれば「なんだよコイツ…」となり、自然に離れていく、

間違っても

「俺から離れてくれ」なんて言うてはいけない、こんなの被害者ぶって

「俺のそばに居てくれ」としか聞こえない。

だから、無視をする、こつすれば簡単に離れていく

ひとりにはもう慣れてる

ずっとひとりで居れば誰にも迷惑を掛けない。

他人に迷惑を掛けてはいけない。

…じゃあ死ねば誰にも迷惑をかけずに済むのではないか？

という考えがよぎった時、すごく怖くなってしまった

そして、ある事を思い付いた。

俺は人に迷惑をかける人間では無く、人に幸せを与えられる人間になれるのではないかと…

俺はずっと自分を演じてきた、汚くて俺に近づくと嫌な事が起こるような人間を…

俺のような人間を出さないために

だから、思い付いたんだ！俺が明るい人間を演じれば、クラスでイジメに遭ってる子や孤立している子や大切な人を救えるのではないかと…。

中学校では俺が気持ち悪いという先入観が出来てしまってるので、高校から始める事にする。

ちよつと意味が違う気もするが高校デビューだ！

俺は明るくなる！

そして優しくなる！

絶対に俺の居る学校でイジメなんか起こさせない！

全員が笑って幸せになれるように！

ちよつと今時の子供が言うのもあれな気もするけど、俺の本当の願い事！

「世界平和！」





## 第4話：怒り

俺がこの部活で一番苦手な人は、副部長の河内先輩だ。

なんで苦手かって言うと、いつも怒っていて怖いからである。

なんか、少しでも気に食わないところがあると「コラッ！」と大きな声で怒鳴ってくる。

俺らの事を目の敵にしているんじゃないかってくらい怒る。

…ある日の事

いつものように河内先輩に怒られていた。

「だからいつも言っているだろう！ 何で同じ間違いを何度も何度も繰り返すんだ！」

そこに登場作山先輩！

「カワちゃん怒りすぎよ。カルシウムが足りて無いんじゃないかしらあ？」

「作山っ!？」

「お姉さんの骨をあげるから、後輩の事を許してあげてちょうだい？」

と言ってビーフジャーキーを取り出す。

「俺は犬かつ?! と言うか骨ですらねえ!」

作山先輩と話していると、あの河内先輩ですら形無しだ。

ビーフジャーキーを手渡すと「じゃーねえ」と言い作山先輩はどっかへ行ってしまった。

河内先輩はさっきまでの怒りはどこへやら、かなり朗らかな顔で

「おしっ、じゃあやるぞ〜」

なんて言ってる、説教されなくて良かったあと言っ気持ちと、自分で言うのもなんだが甘やかしすぎだろ? という気持ちが入り乱れている。

作山先輩はいつも誰かが声を張り上げていたりすると、近づいていき、なだめてしまう。

怒られる事をしているのに怒られないと言っのは良いことだろうか?

別に怒りたい訳では無いけど、そんな事を考えてしまう…。

周りの人たちのイメージだと真面目な副部長とアホな部長と言っ感じだと言っていた。

俺は作山先輩はとっても頭が良くて、いつも考えて行動してると思

えるのだが、それは俺だけだろうか？

こんな、作山先輩だが、一度だけ本気で怒ったことがある…。

普通に練習をしていると、いきなり良く通る低い声で怒りに満ちた声が聞こえた。

「お前、二度とその言葉を口にするな」

周りの温度が5度くらい下がった気がした…。

一瞬、誰の声が全く分からなかったが、その声が作山先輩だと気づいた時、全身に鳥肌がたった。

作山先輩のあんな声一度も聞いた事が無い。

いつもニコニコ笑っていて、仏様みたいな人だったから、その一言は衝撃だった。

言われた1年の男の子も、かなり怯えていた。

そうしたら、作山先輩が明るい声で

「わりい、わりい、中断させちゃって、続けて！

お前は二度とそんな事言っなよ！」

「ハイ……」

小刻みに震えてはいるが、男の子も少しは表情が軽くなった気がした。

が、しかし、その後の部活はヒドかった。

作山先輩の雰囲気がいっつもよりもおかしくて、無理して明るく装っているのが丸わかりで、改めて作山先輩の影響力の凄さを思い知った。

いつもの先輩を太陽とすると、その日は周りをどんどん冷やしていく氷みたいだ。一年の男の子に、なんて言って怒られたのか聞いてみると、

「俺は、あの言葉は二度と言わないと心に決めたんだ」

と言われ全く取り合ってくれなかった。

次の日には作山先輩は治っていたが、俺はその一言がどうしても気になってしまい、さすがに本人には聞けないので、なんとなく知っ  
ていそうな坂籐先輩に相談しに行った。

「昨日の作山先輩のこと何ですが…」

「…」

「…先輩？」

「ああ、いや知らねえ」

嘘をついているようにも、本当の事を言っているようにも見えた。

でも、それ以上は何も聞くことが出来ず、このことは忘れることにした。

…つづく

第5話：大切なもの（前書き）

サクちゃん視点で、少しシリアスです

## 第5話：大切なもの

あんな事言われた位であんなに動揺すると思っていなかった。

『なんだか最近つまらないんですよねー。あゝ死にたいなあ』

死にたい…

こんな事言う奴はバカだと思う、「冗談でも許せない。

ただ俺もそんな事を考えていた時期があったのも事実だ。

俺みたいな奴は二度と現れなくて良い。

我慢して…我慢して…

俺はどうなってもいいから俺の大切な他人を幸せにしたい。

その俺の自分より大切な他人が『死にたい』と言っただぞ？

許せる訳が無いじゃないか！

笑顔がみたいから笑う、悲しい顔が見たくないからケンカを止める。  
俺の行動は全て人の為だ。

どっかの本に『自分の事を考えられ無い奴は人から好かれない』と  
あったがそんなの無理だ。

俺の生きる意味が無くなってしまっ…。

俺はちっぽけかもしれない…けれど、俺に他人を1人でも幸せにする  
力があるのなら、生きてみようと思う。

俺が帰り道を歩いているとき、山本が少しチャラそうな他の学校の  
奴らと路地裏に入るところが見えた。

山本は結構大人しい性格だからあんな奴らと一緒に居るのはめずら  
しい、



気になってしまつて、後をつけて見ると、案の定、楽しみ目的か何だか知らないけど、チャライ奴らに山本が殴られようとしている所だった。

俺は頭の中が真っ白になつて気づいたら、殴ろうとした奴をぶん殴つていた。

相手は5人

1対1では負けなと思うが、この人数じゃ無理だ、一斉にたこ殴りにされる。

「逃げろっ!!!」

それでも山本だけは守りたくて絶対に触らせなかった。

…

何分たったか分からないけど、意識が無くなりそうになっていたとき、俺の卓球部のみんなが20人位現れた、

あのバカ！なんで警察を呼ばなかったんだ！

とか、多分、見当違いな事を思っていて

少し俺によって手傷を負っていたチャライ奴らは、人数にビビったのか、そそくさと退散していった。

「おい、大丈夫か？」

広樹が俺に手を差し伸べる。

俺はその手をとらずに立ち上がる。

体中から痛みが込み上げるが、この手を取る訳にはいかない。

俺は絶対にこの優しいコイツらを絶対に傷付けさせない…。

そう決意し、全員を無視して、家に向かう。

チャライ奴らの顔だつて学校だつて覚えている。

顔だけは守ったので、あまりケガはヒドくないと思つたのか、無理やり病院に連れてくような奴は居ない。

それどころか

「せっかく助けてやったのに」と言っている奴もいる。

けれど、予定通り、それで良い…。

俺みたいな奴は、俺だけで充分だ。

.....  
^UJ

## 第6話：恐怖

学校からの帰り道の事だった、

いきなり肩を叩かれて、友達かな？って思って振り向いたら、なかなか良く分からないチャライ人たちだった。

「ちょっと話があるんだけど、あっち行かねえ？」

少し脅すような声で、争いを好まない俺は、思わず頷いてしまい、ついて行く事になってしまった。

人気の無いところに入って行って、どんどん恐くなってくる。

どうやって逃げるか考えていると、突然チャライ奴らの一人が口を開いた…。

「俺らな、殴られても抵抗しない奴探してたんだよ。」

体中の血の気がいっぺんに引いた気がした。

いかれてる……怖い……なんで俺がこんな目に合わなきゃならないんだ  
!!!

俺が恐怖で黙っていると、そいつが腕を振りかぶっているのが見え  
て、痛みを備え目をギョッとつむる。

ドカッ

ドスン

…

え…痛くない…けど…

この音は？

恐る恐る目を開けるとそこには作山先輩の後ろ姿

「逃げろっ！！！！」

俺は思わず走り出した

人通りの多い所に着いて、作山先輩を置いてきた事による、すさまじい自己嫌悪に襲われる

ヤバい…ヤバい…

どうしよう…どうしよう…

混乱した頭で携帯を取り出し、震えている手で文面を打ち、送信する

『作山先輩を助けて』

部内のみんなに一斉送信した。

その後、力が体に入らなくて道脇に座り込む

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

と、恐くて戻れない情けない自分にイラつき、それでも戻れない事を作山先輩に謝りながら…。



道脇でうずくまっていると、いきなり肩を揺さぶられた、そして怒るような声で

「ハア…ハア…サクはっ！？サクはドコだ！！」

坂籐先輩だ…

すごい息切れしていて、思いっきり走って来たのがわかる。

震えながら道案内しているとぞくぞくと人が集まって来て、部のほぼ全員が来ていて、20人位にはなっていた。

俺が殴られそうになっていた所に着くと、作山先輩の後ろ姿が見えた、

まだ作山先輩は殴りあっていた、というより自分の後ろに行かせないようにしているようにも見えた。

「オイッ！…お前らっ！…！」

坂籐先輩が普段では考えられないような声をあげる

チャライ奴らは人数にビビったのか、そそくさと退散していった、そして、作山先輩と目があつた。

助けてもらつたといつて不謹慎だと思つが、今、作山先輩を恐いと思つてしまつた。

いつもの先輩をみんなを照らす太陽とすると、今は一匹狼のよう…。

「オイ、大丈夫か？」

坂籐先輩が座つている作山先輩に手を伸ばす…が

その手を取らずに立ち上がり、そして、一言も発さず、どこかへ行つてしまつた。

そして、自分が『ありがとう』『も』すみません』っていないことに気付いて、今は行きにくいので、明日言いに行く事にした。

このことを、後で後悔する事になるのも知らないで…。

^UJ.....

## 第7話：守りたい

次の日…。

朝、学校に着くと少し教室が騒がしかった。

会話を盗み聞きしていると、緊急全校集会が開かれるという放送があったらしい

少し面倒に思いながらも、みんなが移動し始めたので、それに便乗して、体育館に移動する。

体育館に着き、しばらく経つと、壇上でたしか教頭だと思われる人が話しはじめた。

はっきり言って全く興味が無かったので、聞こうともせずボケーっとしていた。

が、たまたま聞いた言葉に

「先日暴力事件がありました…」

という声が聞こえて、壇上に釘づけになってしまった。

この先生の言葉を簡単に要約すると

先日、暴力事件があり。うちの生徒一人が他校の無抵抗の生徒を一方的に殴ったという事件があった。

これは本人が自白してくれて、その他校の生徒も了承しているとのことだと、この問題を起こした生徒には厳重な処分を下すので、安心して学校生活を送って欲しい。

ということを長々と30分位ぐだぐだと話していた。

良くわからないけれども、作山先輩の事が頭に浮かんだ。

全くやった事が違うのに、どうしてか作山先輩の事のような気がしたんだ。

そして、全校集会が終わってもいないのに坂籐先輩が、出て行くのが見えた。

これを見て、これは確信へ変わった。

わけ分らないけれど、坂籐先輩を追いかけなきゃいけない気がして、俺は全校集会を抜け出した。

坂籐先輩に追いついて話かける

「先輩、どこ行くんですか？全校集会終わって無いですよ！」

俺の声に反応した先輩が振り返って答える

「あのバカを一度位殴ってやらなきゃきがすまないっ！！ お前の事殴ろうとした奴まで庇いやがって、自分一人に風が当たるようにしやがった。絶対許せねえ！！」

なんか、メチャクチャ怒ってるけど、俺は…

「俺も一緒に行きます！」

残念ながら、その日は作山先輩は見つからなかった

授業をサボったのはこれが初めてだ。

坂籐先輩は行動が早かった、学校まで帰ってくるといきなり走って  
校長室まで駆けていき、、、、、

校長室っ！？いやいや、ここ入るのは勇氣いるだろっ！

とかいう俺の心配をよそにドアを躊躇も無くバンッ！と開け放ち

「サクヤマアキラ作山明の処分を取り消して下さいっ！ー！」

と言いつ放った、中にいた校長もぽかんとしている。

そして、真剣な顔になり話し始めた…

「君が誰だか知らないが、暴力事件を起こした彼をどうして庇うんだい？」

「あいつが嘘をついているからです」

「ほう、どんな？」

「あいつは自分から手を出すような奴じゃない、こいつがからまれている所を助けたんだ」

いきなり振られてびっくりしたが「ハイッ」と答える。

「はあ、そんな嘘をついてどうする、そんなの作山くんになんのメリットも無いじゃないか。それに相手方は怪我をしている。暴力沙汰で、この学校の評判を落とす訳にはいかないんだよ。」

「しるせえっ！…！」



大声を出されて普通にビビる

「あいつは自分のメリットなんか考えた事の無い奴なんだ!!」

あいつは全ての人に優しくする。たとえば、どんなに自分を傷つけた奴でも…

うちの全校生徒があいつの味方だ!!

サクが自分の事を守れないなら俺らが守ってやる!!

処分を撤回しろ!!」

…ヤバい、何だか泣きそうだ。

「わ、わかった、まだ処分は決まってるわけではないので、君の言うことも視野にいれて検討しようと思う」

校長先生もタジタジだ、けど、これで退学という事は無くなるだろう。



## 第8話・良いっしょ

.....

俺を知っている全てのみんなへ

今誰かがコレを読んでいる時は俺はこの世にいないかもしれません。

俺にとっての生きがいは、人を幸せにすることです。

今回の事件で俺を怖いとか、怯える人が出てくるでしょう。

俺が考えた結果、この後の人生で、俺が幸せに出来る人数と不幸にする人数を考えた時、俺はもう人を不幸にすることしか出来ないのではないか？

という結論に達してしまいました。

俺がいなくなつた事で、もし泣いてくれる人がいるのならば、それは俺にとっては悲しいことです。

俺がいなくなつた事で嬉しいと感じてくれる人がいるならば、それは俺も嬉しいです。

俺は人が好きです。すっげえ好き。だから全ての人に幸せになつて

欲しい。

こんな奴だから悲しいとか思わないでください。

そして、忘れて下さい。

作山明より

- - - - -

こんな事を書いて、くしゃくしゃに丸めて捨てる。

本音丸出しの事を書いたら同情されてしまう。

俺が死んだ事で誰も悲しまないような…

- - - - -

みなさんへ

俺は人が嫌いです。あいつらもムシャクシャしてて殴りました。

こんな所にいたくないので、どっか行くつもりです。

俺のものが全部捨てて良いし忘れて下さい。

作山明より

.....

何やってんだ俺、こんな遺書まで書いて…

書いていたペンを置いて考えてみる。

俺は人を一人でも幸せに出来ただろうか？

一人も不幸にしてないだろうか？

人の悲しみを楽しみに変える事が出来ただろうか？

人を幸せにしたいと願っているのに、それがもうどうやって良いのか分からない…。

今は全てがマイナスに働く気がする。

大切に大切に、全部護りたいのに、俺がいたら、俺のせいで不幸になる人が出てきてしまうかもしれない。

そんなの俺には自分が死ぬよりも耐えられない！

だから、居なくなろうと思った。

でも、それもまた逃げてるだけで、俺はまだやれる事を全部やっていない気がする。

だから、もう少し頑張ってみようと思う。

机の中にさっき書いたものをしまっていると、携帯が鳴った。

そしてメールを開くと、泣き虫だった俺が人を笑顔にするために泣かないと決めた、あの日から…

初めて泣いた。

- - - - -

f r o m 坂籐広樹

お前の考えなんかお見通しだ、バカ！

校長に直訴してサクの処分取り下げてもらったから。

今度こんな事するときは、俺に言え！

お前の処分取り下げの時、署名集めたんだけど、全校生徒の7割はすぐに集まったぞ！

みんなお前に幸せにしてもらったんだ！

お前にはもっと人を幸せにして、幸せになる義務がある！

勝手に学校から居なくなるなんて、俺ら全校生徒が絶対許さない！

わかったなっ！！

- - - - -

- - - - -

f r o m 山本昭人

先輩の処分になりましたよ！

俺スツゴク嬉しいです！

会ってから言いますが、すいませんでした！

そして、ありがとうございます！

先輩には何回感謝したって足りないくらいなのに、こんな事になってしまっ..。

今度は俺がいくらでも助けられるようになりますから、待ってて下さい！

俺がこんな強い気持ちを持てたのも、優しい気持ちになれたのも、全部作山先輩のおかげです！

本当にありがとうございます！早く学校来てください！

- - - - -

それから卓球部を中心に続々とメールがくる。

俺がやってきた事は間違いじゃ無かったんだろうか？



まだ、人を幸せに出来るのだろうか？

拭いても拭いてもまだ出てくる涙を拭いながら、この大切な人達が絶対に幸せになって欲しいと願い、

そして、俺にその手伝い出来るなら、俺の全てをかけて頑張ろうと誓った。

｝ e n d ｝

## 第8話・良いつしょ（後書き）

この作品を作るとき、ずっと明るくて、ほのぼのしてるような作品を作りたいと思ってたんですが…。

なぜかどんどんシリアスに

自分で見てて悲しかったです。

でも、自分的には楽しく書けたんで良かったと思います。

ここまで読んで頂けた方、本当にありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8889e/>

---

我らは卓球部っ！！

2010年10月15日22時26分発行